



THE NIKKEI MAGAZINE

Education

日経マガジン 教育特集号
20 October 2023

中学受験と 子育てを考える

学びは冒険のはじまり
「自ら道をつくる力」が育つ
中高一貫校・有力塾の環境とは

巻頭インタビュー

激動の時代の
変化を楽しみながら
自分の好きなことに
挑戦してほしい

デジタルえほん作家

石戸 奈々子氏

激動の時代の変化を楽しみながら自分の好きなことに挑戦してほしい

デジタルえほん作家

石戸 奈々子 氏



未知の世界に憧れ、航空宇宙工学を志すも、マサチューセッツ工科大学（MIT）のメディアラボに出会い、新しいデジタル社会の創造を支援する世界に飛び込んだ石戸奈々子氏。産業革命以来の激しい変化の時代に多感な思春期を過ごせることは幸せ、変化も学びも楽しんでほしいと話す。

——お仕事の内容を聞かせてください。

一言でいえば、「クリエイティブな場をつくる」仕事とまとめることができます。子どもたちの創造的な学びの場をつくりたかったので、まずNPO法人CANVASを立ち上げました。今の子どもたちは生まれながらにデジタル社会を生きるデジタルキッズ。彼らの新しい感覚を大切にしながら、学びと遊びの秘密基地のような場を、産官学民の連携によってつくり出していく活動です。

そこから派生して、1人1台情報端末を持って学ぶ場の用意、

——子どもの教育だけにとどまらず、幅広く活躍されています。人工知能（AI）が登場したことで、社会は今、産業革命以来の壮大な社会実験に巻き込まれようとしています。そこで現在では、子どもたちの学びの場づくりと並行して、大人たちを対象にしたクリエイティブな場をつくる活動も始めました。それが国内外の研究機関や行政、個人をフラットに結びつけるBlab（ビーラボ）です。

——どのような活動を行っているのですか。

THE NIKKEI MAGAZINE Education

中学受験と子育てを考える
— 学びは冒険のはじまり —

CONTENTS

- 03 巻頭インタビュー
石戸 奈々子氏
- 06 特別対談／中等教育もグローバル時代へ
英語力、主体性の育成めざせ
開成中学校・高等学校 校長 野水 勉氏
SAPIX YOZEMI GROUP 共同代表 高宮 敏郎氏
- 08 スペシャル対談／グローバル教育とは何か
海城中学高等学校 校長 大迫 弘和氏
SAPIX YOZEMI GROUP国際教育事業本部長 高宮 信乃氏
- 12 英語人 Interview／平岡 睦
東京大学経済学部 4年 山下 莉紗氏
- 14 School Report
豊島岡女子学園中学校・高等学校
広尾学園小石川中学校・高等学校
八雲学園中学校高等学校
- 19 2024年度 中学入試を読む
森上教育研究所 代表 森上 展安氏

日経マガジン エデュケーション
企画・制作＝日本経済新聞社

編集協力＝広真アド

プレゼント 本特集に関するアンケートにお答えいただいた方の中から、抽選で図書カード2,000円分を10名様にプレゼントします。
★詳しくは19ページへ

Special Interview
特集
次代へのメッセージ

【右】CANVASワークショップ
【中】教育情報化推進法設立祝シンポジウム
【左】下町で生まれ育ったので毎日下駄草履で過ごしている



新しいプロジェクトを起こしたい人たちが、各自のリソース

を持ち寄り、知見を融合しながら新しい価値を生み出せるような、イノベーションやインキュベーションのためのプラットフォームを提供しています。

このラボ以外にもいろいろな組織や会社を展開しています。いずれも自らプロジェクトをけん引するのではなく、新しいテクノロジーを駆使して新しい社会を創造する場を、どのようにつくるかということに一貫して取り組んできました。

ライフスタイルの変化
実感できた中高時代

——どのような中高時代を過ごしたのですか。

母がプログラマーだったこともあり、幼い頃からパソコンなどの情報機器に囲まれていたが、それほど夢中になっていたわけではありません。ちょうど中高から大学にかけてインターネットの普及が始まった時期だったため、中学生のときはポケベルを持ち、高校生になるとPHS、大学は携帯電話でモードと、エンドユーザーとして可能な限り新しい技術に触れようとはしていました。

それに伴って、ライフスタイルが大きく変化していきました。真夜中でも親を介さずに友だちと連絡がとれるようになり、待ち合わせの仕方が変わり、人とのつながりやコミュニケーション

ンの方法も多様になるなど、新しい技術がいかに人々の生活を変えていくのかを、目の当たりにできた世代だといっているでしょう。どこかで現在の活動とも呼応していると思います。

——将来の進路については、どのように考えていたのですか。

小学生の頃から週末を科学館で過ごす兄と一緒にいたこともあり、宇宙に関わる仕事がしたいと一途に思うようになりました。ですから大学受験のときも、航空宇宙工学科のある大学しか志望せず、東京大学の工学科に進学することになりました。

今ある未知の世界から
今はない世界の創造へ

——ところが、航空宇宙学科には進んでいませんね。

工学部に入ってみると、想像していた世界とは違っていたのです。そんなときに出会ったのがMITのメディアラボでした。授業でビデオを見て感銘を受け、私が行くのは宇宙ではなく、ここなんだ！と、天啓を受けたように感じました。

今振り返れば、宇宙への興味は、結局は「未知の世界に対する探究心」だったのではないかと思います。メディアラボが創造しようとしているのもデジタル化による未知の世界です。

宇宙は今ある未知の世界を探求する世界ですが、デジタルの

世界は、今はない未知の世界という違いがあり、今はない世界をつくることに魅了されたのではないかと思っています。

——その夢を叶えましたね。

学部時代に2回メディアラボに見学に行ってます引かれるようになり、大学卒業と同時に大学院を休学し、メディアラボの客員研究員になりました。

オープンでフラットな研究環境に魅せられたこともありすが、デジタルの力で、一方的な教授から主体的な学びに変えていくプロジェクトに接したことが、今の仕事を始めるきっかけにもなりました。メディアラボ在籍中にCANVASを立ち上げ、日本とボストンを往復する生活を2年間続けた後、大学院に戻り、現在に至ります。

変化に適応しながら
学び続けることが大切

——中高時代に心がけておいた方がいいことはありますか。

これから中高生は、私がインターネットの普及で感じた以上の大きな変化に遭遇します。産業革命以来の大変革期に、多感な思春期を過ごせることは幸せだと思います。変化の激しい時代は、どう生きたいのか、どんな社会をつくりたいのかという、人間の意志が大きく問われます。変化に適応しつつ、自分の好きなことにチャレンジし、将来の生き方を模索でき

るような時間を過ごしてください。

——保護者にもアドバイスをお願いします。

既存の価値観を押しつけてもあまりいいことはありません。教育に正解はありませんから、ご家庭の教育方針や子どもの個性や成長に応じて、その時々で考えていくしかないのだと思います。ただ、今後は新しいデジタル技術やAIを使いこなすことが、すべての人にとっての基礎教養になります。保護者の方がそういうものを学び続けていく姿勢を子どもに見せることも、子どもの学びにも好影響を与えるはずだと思います。

石戸 奈々子氏 (いしど ななこ)

1979年東京都生まれ。女子学院高等学校出身。2002年東京大学工学部システム創生学科卒。MITメディアラボ客員研究員を経て、2006年同大学大学院学際情報学府修士課程修了。MIT時代にNPO法人CANVASを設立。(株)デジタルえほん、一般社団法人超教育協会.B Labの代表も兼務。慶應義塾大学メディアデザイン研究科教授。省庁の委員等も歴任。「子どもの創造力スイッチ!」など著書多数。



特集

次代のリーダーを目指して
中高時代をいかに過ごすべきか

中等教育もグローバル時代へ 英語力、主体性の育成めざせ

社会のグローバル化が進むなか、中等教育の場でも留学や海外研修が一般的になってきた。数年後の海外進学を見据えて中学・高校を選ぶ動きも見え始め、学校が担う国際教育の重要性はますます高まっている。これから中学・高校で子どもたちはどんな力を身に付けていったらよいのか。また、中高時代をどのように過ごしたらよいのだろうか。開成中学校・高等学校校長の野水勉氏とSAPIX YOZEMI GROUP共同代表の高宮敏郎氏に語ってもらった。

「留学したいけどできない」
大きな理由は英語力不足

高宮 野水先生は名古屋大学の教授をされていたとき、国際交流の推進に尽力されました。開成では近年、海外大学への進学に力を入れていきますから、これまでのご経験に大きな期待が寄せられることと思います。2020年に開成の校長に就任されたときにも、グ

ローバル教育の充実を目標に掲げていらっしゃいましたね。

野水 名古屋大学では、化学の研究教育に携わる傍ら交換留学のプログラムを運営するコーディネーターをしていました。大学には2000年を過ぎた頃から、アメリカ、ヨーロッパからもアジアからも学生がどんどん来るようになりました。彼らは世界で活躍したいという思いが強く、そのため

に日本の文化や歴史、社会などを意欲的に学んでくれるのをうれしく思っていました。交換留学の仕組みがありましたので、こちらからも向こう（交換留学の相手大学）に行ける環境を用意できました。でも日本人の学生は、最初は「行きたい」と言っているが、現実の留学につながるものが多かったですね。

高宮 いざ行くととなると、なかなか踏み出せないわけですね。大きな理由は何でしょうか。

野水 経済的な事情や就職、留学への不安もありますが、英語力が留学に必要なレベルに達していないという理由が大きいと思います。名古屋大学が相手先に選んだ海外有力大学への交換留学には基本的にTOEFL iBT®80以上の英語力が必要です。大学入学時から意識して勉強すれば、3年生までにはクリアできます。でも、1年生の段階ではまだそこまでの

意識が育っていません。2、3年生になってから本気で「行きたい」と思っても、そこから足りない英語力を伸ばして留学できるかというと、実現できるのは2、3割程度です。留学したい学生は潜在的にたくさんいますが、実際に行けるのは名古屋大学でも数%です。

高校卒業時点での英語力をもっと伸ばしておいてほしい、というのが大学にいたときの実感です。大学に入る時点である程度の英語力を持つていないと、留学を目指すことは難しいと思います。東京大学で交換留学を担当する先生の話では、東大に来る留学生たちは、日本の東大生と話すとき驚くそうです。東大生はこんなにも英語ができるのかと。それは京都大学でも同じです。そういう状況を何とかしたいと考えていたので、「開成の校長に」というお話をいただいたときに、引き受けた次第です。

「東大を目指して開成」から
「海外大学を目指して開成」へ

高宮 SAPIX YOZEMI GROUPには、海外進学や留学を支援するチームがあります。そこで英語の授業を行っています。が、小さいときから頑張っている子でも、書く力と話す力を伸ばすのは苦労しています。やはり、自分でかなり意識的にトレーニングしないと厳しいように思います。私たちがサポートしているご家庭からも、名門私立の小・中学校をやめて海外の学校に行きたいという相談が寄せられています。全体的な傾向とまでは言えませんが、「良い学校だったら日本の学校でなくても構わない」という考えを持つ保護者は少しずつ増えています。その意味では、開成のような名門校といえども、グローバルな競争の中にいると感じます。

野水 名古屋にいたときはあまり感じませんでしたが、東京に来て中学・高校の英語教育が進んでいることに驚きました。国際化、グローバル化を旗印に改革を行う学校が保護者の方たちの間で注目されていることも含め、東京では確実にグローバル化の波が来ているように感じます。

開成では両親とも外国籍、あるいはどちらか一人が外国籍の生徒も増えています。今年中学に入ってきた300人のうち20人近くがそうですし、高校から入ってきた



開成中学校・高等学校校長

野水 勉 氏

1954年福岡県生まれ。73年開成高校卒。東京大学工学部、同工学系研究科工業化学専攻修士課程を修了。動力炉・核燃料開発事業団研究員、名古屋大学工学部の助手を経て、89年工学博士号を取得。90～91年ハーバード大学医学部客員研究員。92年名古屋大学工学研究科講師、96年に同大留学生センター・短期留学部門教授に就任。同大学国際コンソーシアム推進室長、総長補佐、国際教育交流センター副センター長などを歴任し、20年4月より現職。11～17年留学生教育学会会長。

SAPIX YOZEMI GROUP共同代表

高宮 敏郎 氏

1997年慶應義塾大学経済学部卒業後、三菱信託銀行（現・三菱UFJ信託銀行）入社。2000年、学校法人高宮学園代々木セミナーに入職。同年9月から米国ペンシルベニア大学に留学して大学経営学を学び、博士（教育学）を取得。2004年12月に帰国後、同学園の財務統括責任者として従事し、2009年より現職。SAPIX小学部、SAPIX中学部、Y-SAPIXなどを運営する株式会社日本入試センター代表取締役副社長などを兼務。

100人の中でも10人ほどが外国籍を持つ親御さんの子どもです。そのような中に「ハーバード大学に行きたいので、開成を選びました」という生徒がいました。「そういう発想もあるのか」と、少しうれしく思いました。

高宮 「東大を目指すために開成に入る」という従来の方向性が変わりつつあるのかもしれないですね。「海外のトップスクールに入るために開成に入る」という選択肢が生まれてきたのは、やはりグローバル化のうねりを感じます。開成の英語教育は進んでいますし、期待が高まっていますね。

野水 開成の英語教育は非常に充実しています。中1からモチベーションを持てるように、英会話のクラスはネイティブの先生が入って少人数で行います。海外への短期留学プログラムも中2から参加できるものを含め、さまざまな形で参加を支援しています。高

校生対象の英語特別講座（自由参加）に実践的な英語力取得を希望する生徒が参加しています。留学フェアや海外大学フェアも実施しています。意識の高い保護者の方は、情報収集のために中1の段階から生徒と一緒に来場しますから、そういう環境づくりは大切だと思います。

**仲間と共に考え実行する
学校行事が育む主体性**

高宮 感染症対策の緩和に伴い海外研修や学校行事が再開された教育現場に、今度はChatGPTという新しい波が押し寄せました。ChatGPTとの付き合い方についてはどう考えですか。

野水 優れていると思いますし、「使うな」と言ったところで何の効力もないでしょう。現に、生徒たちは進んで使っているはずですから。例えば、ネイティブの先生は英作文を教える道具として使うな

ど、教員も授業に活用しています。ただ、オリジナリティーを創り出すことはChatGPTにはできません。生徒にも先生にも使えないという理由が大きいと思います。名古屋大学が相手先に選んだ海外有力大学への交換留学には基本的にTOEFL iBT®80以上の英語力が必要です。大学入学時から意識して勉強すれば、3年生までにはクリアできます。でも、1年生の段階ではまだそこまでの

高宮 生徒は今、全員がタブレットを持っているのですか。

野水 今年の4月から中学1年生にタブレット（iPad）を持たせています。学校が購入して全員に貸与する形です。高校1年生は今年から全員が都の助成を受けてMacBook Airを購入しました。授業では各教員が教科の特性を踏まえて使っていますし、子どもたちは部活や学校行事でも活用しています。

高宮 学校行事といえば、開成はボートレースや運動会など伝統ある名物行事が多いですね。ボートレースが4月で、運動会が5月ですから、中学に入学したらすぐに応援練習が始まって、びっくりするのではありませんか。

野水 応援練習は先輩の指導が厳しくて有名でしたが、今はほとんど儀式化しています。でも儀式だとわかってるので、中1の生徒に聞いても「怖くなかった。先輩方は優しかった」と言います。

高宮 ボートレースや運動会では、中学生が入学して初めて先輩や仲間と一緒に取り組む行事です。開成生になったことを実感できる良い機会でもありますね。

野水 中学入学当初は、開成のカルチャーにぶつかって驚くことがあるかもしれませんが、でも、先輩からいろいろ教わると、開成がどういう学校なのかわかってきます。運動会では先生の指示で動くのではなく、先輩たちがどんどん進めていく姿を見て、自分たちで考えてやるものと自覚していきます。中2以上の学年旅行では、委員の生徒を中心に、1年かけて行き先やアクティビティーなどを自分たちで考えて決めていきます。そうした経験が自覚を促し、自分たちで責任を持ってやり遂げる訓練になります。学校行事は、主体性を育てるのに非常に役立っていると思います。

高宮 海外の学校を目指す場合も、主体性は不可欠です。自分の意見を主張したり、自分から積極的に行動したりすることは、どんな場でも求められます。そう考えると、中高6年間にあける一日一日はとても大切だと思います。

**夢中になれることを見つけ
一生懸命に取り組む**

高宮 最後に、小学生時代、そして中学・高校生時代にはどんなことを大切にして過ごしたらよいのか、教えていただけますか。

野水 中学受験のために知識を詰め込むことは、ある程度、必要かもしれません。でも、そのための競争しかない毎日にならないようにしてほしいですね。自然や生

き物を観察していると、疑問が湧くことがたくさんあります。博物館や美術館で先達がつくり上げたものを見て、興味を覚えることもあるでしょう。そうすると、自分なりに調べたり考えたりしたくなるものです。そんな興味の対象が持てるようになってほしいと思います。保護者の方は好奇心を育てるお手伝いをしてください。

中学・高校に入ったら、行事や部活など、学校で仲間と共に取り組む活動の時間を大切にしてください。課外活動は人間形成のうえでとても重要です。

高宮 中学・高校生になると、「なぜ、こんなことに夢中になっているのだろう」と思うことがあるでしょう。でも、それはすぐく尊いことだと思えます。例えば東京の野球部。ご存じの通り、東京六大学野球ではいつも最下位です。他大学の野球部は、野球推薦で入学する甲子園レベルの学生たちのチームです。そんな相手になんとか勝つてやろうと、120人もの部員たちが頑張っています。周りから見たら「どうして？」と思うかもしれませんが、彼らはそこに価値を見いだして、一生懸命にやっています。ですから、保護者の方も、子どもが何かに夢中になっていたら、「なぜ、そんなことを」などと言わず、温かく見守ってあげてほしいですね。好きなことをやり切って得られるものはたくさんあると思います。



海城中学高等学校校長
大迫 弘和 氏

1953年東京都生まれ。東京大学文学部卒。国際バカロレア(IB)教育関連の文部科学省委員、都留文科大学特任教授、千代田インターナショナルスクール東京学園長などを歴任。2023年4月より現職。



SAPIX YOZEMI GROUP国際教育事業本部長
高宮 信乃 氏

1978年東京都生まれ。1999年ニューヨーク大学卒業後、MBAを取得。2014年にSAPIX YOZEMI GROUP海外進学部門のY-SAPIX Global Campus(YGC)を立ち上げる。3児の母。

何のために海外をめざすのか 目的意識を育てることが重要に

グローバル教育の必要性が叫ばれて久しいが、インターネットで世界とつながるようになった今、その中身にも変化が求められている。海外を体験すること自体に意味があった時代とは違い、現地に行かなくても世界中の人と交流できるようになり、留学や海外研修においても、より本質的な目的が問われるようになったといえる。日本は今後、どのような視点に立ってグローバル教育を進めていけばよいのか。海城中学高等学校校長の大迫弘和氏とSAPIX YOZEMI GROUP国際教育事業本部長の高宮信乃氏のお二人に話を聞いた。

で、グローバル人材として形になっていくのではないかと思えます。英語さえ話せばいいというのではなく、さまざまな場面で英語を話す経験を積み重ねていくことが重要です。そこには当然、たくさんの失敗があります。失敗を積み重ねる経験も必要なのです。ただ、使う英語そのものは「ジャパニーズイングリッシュ」で構わないと思っています。それも個性です。

大迫 私の英語は完全にジャパニーズイングリッシュです。それでコミュニケーションができるという絶対的な自信があります(笑)。

高宮 きれいな発音で話す必要はないですよ。話せるかどうかです。日本人は失敗を恐れるという完璧主義者が多いので、完璧にできるまで話さないようなところがあります。そうした意識をまず取り払ってほしいと思います。

でない子も物静かな子もいます。そういう子は「帰国生らしくない」と言われてしまいます。結局、その変更は強要される中身が「日本らしさ」から「帰国生らしさ」に変わっただけだったのです。その後、80年代に入ると、帰国生一人ひとりが持っているものを大切に「個に応じた教育」を行おうという形ができました。「個に応じた教育」は教育の本質で、帰国生教育に限ったことではありません。帰国生教育の本質を語っていくと、最後は教育の本質にたどり着くということになります。

高宮 私は父が外交官だった関係で、幼少期はアメリカ、パキスタン、スーダン、オーストラリアなどで暮らしました。小学校3年生のときに一時帰国しましたが、まさに先生がおっしゃった「救済・適応」時代の帰国生でした。日本語もともにできなかった私が学校の先生や周りの生徒たちから言われたのは、「ここは日本なんですよ」という言葉です。頑張っただけなのに、そういう気持ちにはありませんでした。そのような言われたことはずっと心に残っています。

た。先生の「間違っていた」というひとりで救われました(笑)。
大迫 私が謝ることではないのですが、謝りたい気持ちになります(笑)。
——そうした帰国生教育の変遷がある一方で、今度は日本で育った子どもたちに対する国際教育が急速に進展していくわけですね。
大迫 日本の教育現場では90年代から、私立高校を中心に夏休みを利用して短期の海外研修を行う学校が増えてきました。午前は語学の授業、午後はアクティビティ、宿泊はホームステイというのが典型的なパターンです。ほとんど業者任せですが、それまでの歴史からすれば、子どもたちを海外に連れて行くこと自体が大きな変化でした。
その後、研修内容や行き先は多様化していきますが、時代の中で大きく流れが変わる二つのポイントがありました。一つは世界がインターネットで結ばれるようになったことです。昔は海外では日本語に触れる機会がほとんどありませんでしたが、今はインターネットで日本語と接することもできます。もう一つのポイントはコロナ禍を体験したこと。コロナ前とコロナ後で世界とのつながり方は大きく変わりました。インターネットで日本語が共有される状況と今回のコロナ禍。この二つを踏まえて、教育の国際化についての発想を変えていかなければい

けないと強く思っています。
高宮 今も90年代的な発想で、夏休みに生徒を海外に連れていくことがグローバル教育だと思っている学校は少なくないかもしれませんね。インターネットで世界とつながれる状況の中で、海外に行って外国の人と会ったり、いろいろな体験をしたりすることの意味を考えていかなければならないということですね。
大迫 オンラインで会えるのだから行かなくてもいい、ということでもありません。そのあたりをどう整理していくかは、とても重要です。社会状況によって帰国生教育が変質してきたように、教育のグローバル化、例えば留学という経験についても何らかの変化を組み込まないと、本当の意味での教育デザインにはならないと思います。

きれいな発音でなくてもいい まずは英語を話せること

——留学や海外研修も変化が必要だというお話ですが、日本国内ではどんな教育をグローバル教育の出発点にしたらよいのでしょうか。

高宮 何と言っても、まず英語を話せるようにすることだと思います。英語が話せればグローバル人材だとは思いますが、英語でコミュニケーションすることによって、できることは格段に増えます。さらに海外を経験すること

徒の多くは、やはり帰国生ですね。彼らが海外大学に進学し生き生きとしているので、一般生もチャレンジするようになったという流れです。
——例えばアメリカの大学では、日本人といっても、ほとんどの生徒がインターナショナルスクールなどから入学しているという現状があります。大学側としては、日本の一般の高校で学んだ生徒にもっと入ってほしいという希望はあるのでしょうか。

高宮 大学としては多様性のあ

るバックグラウンドがほしいので、インターナショナルスクール出身の日本人ではなく、日本の一



2018年高校模擬国連国際大会で最優秀賞に輝き現在はハーバード大学に通う山田健人氏(中央)

海城からハーバード大学に進学した生徒がいますが、彼は在校中に、ニューヨークで行われた高校模範国連国際大会で最優秀賞を受賞しています。自分がコーディネーターになって途上国のまとめ役をしたことが評価されました。国際社会では相互に理解し、尊敬し合うことが非常に重要です。彼はそうした相互尊敬の大切さを本校での教育を通して学んだのだと思います。本校の教育が世界標準の教育と連続性があることの証明ですから、彼のような卒業生がいるのはうれしいことです。
高宮 貴校は学術系オリンピックの受賞者も多く出していますね。先日実